

う読む」「子どもたちは尾崎豊に何を求めるのか」といったテーマの話がちりばめられた校内研修も楽しいだろう。音楽や美術の教師が自分の作品を同僚に紹介し、制作過程の苦悩と創造の喜びについて語るといった形の校内研修も設営されていい。教師一人ひとりが各自の研究テーマをもち研鑽を積むのは、望ましいことであり素晴らしいことだ。一見したところ授業とは無縁に思われるテーマの研究報告が、根源的なところで同僚の知的関心を触発し、教師の自己変革を喚起し、教室の授業を活性化するだろう。研修のマンネリ化は、教師の自己変革と成長を阻害する。校内研修にあっては、教師同士の相互触発的な知的交流を可能にする個性的でユニークなスタイルが創造されるべきである。

3 研修のモラル（自己変革の倫理）

教師は、何よりもまず人間である。現代哲学は、人間のことを「実存（じつぞん）」と呼ぶ。実存=existence は、「外に－出て行く」という意味のラテン語 ex - sistere に由来する。実存としての人間は、現在の自分を脱け出て、自分の外に出て行き、現在の自分とは違ったものにこれからなろうとする。人間は、自己超越的に自己を形成するというわけだ。脱皮しないへビは亡びる。人間は、たえず古い自分から脱皮しながら、新しい自分を創り上げていくのである。人間は、たえざる自己変革を強いられているのである。

教師は、大学を卒業し教員免許状を手に就職したとき、すでに完成された教師として存在していたわけではない。教師は誰も、いかなる時点においても未完成のままであり、それゆえ

にたえず自分を資質と技量に関して向上志向的に変革しなければならない。教師は、たえず自己脱皮を続けなければならない。教師であること——それは、実践と反省によって自己が拡大的に再生産される過程に身をおくことである。教育的資質と技量に関しては、謙虚がすべてであって高慢の侵入を許してはならない。向上志向の研修による自己変革は、実存としての教師の中味であり、不可避の義務である。

教育における一定の成果の獲得は、つねに新たな教育的課題を必然的に生み出す。それはちょうど、円の内側の拡大がつねに外側の拡大をもたらすのと同じである。教師は、その課題の解決に向けさらなる精進を迫られる。教育実践における満足と休止、向上心の放棄は、怠惰を意味する。この怠惰は、教育的良心の恐るべき麻痺である。

教師が現実の自己を否定し、自分の教育的資質と教育的技量の現実について改善と改革を志向するのが理想主義である。教師の理想主義は、未完成の自分の在りようを自覚症状へともたらし、たゆみなき研鑽による自己変革を要請する。教師は誰も、より良き教師を憧憬する。憧憬は、教師に現実肯定を断念させる。現状肯定と現実への埋没は教師にとって怠惰にほかならず、教師としての主体的モラルの欠如を意味する。子どもは、自分が誇り尊敬する教師のもとでのみ、学習意欲を喚起される。子どもの期待と信頼に応えるためにも、教師は、自己変革すなわち自分の教育的資質と技量の向上に努めなければならない。研修は、この自己変革の倫理の実践形態なのである。

《明珍昭次先生のプロフィール》

1951年 東北大学文学部哲学科卒業 1954年 同大学文学部大学院特別研究生前期課程修了 1975年 福島大学教育学部教授
 1994年 福島大学を停年退官、同大学名誉教授 福島県立医科大学・奥羽大学講師 1995年 東日本国際大学教授
 著書 『人間の哲学』（編著）尚学社 『人間存在の探求』（共著）丘書房 『民族の現象学』世界書院 『小・中の先生たちへの応援歌』八潮社
 訳書 B. ダンナム著『英雄と異端』（共訳）みすず書房 C. V. ポースト著『心と脳は同一か』（共訳）北樹出版 ほかも多数 《福島県出身》